

私を育てた
あの時代、あの出会い

第12回

苦手な指導から逃げない 初任校での教えが出发点となった

鹿児島県 長島町立獅子島中学校校長 祖母仁田政明
SOBONITA MASAKI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、祖母仁田校長が語る。

オルガン演奏経験のない
私を音楽主任に抜擢

初任校は愛知県の小学校でした。郷里の鹿児島で中学校教師になりました。かったのですが、採用試験に不合格。通信教育で小学校教員の免許を取得し、採用された愛知県で教師人生を始めたのです。ところが、うれしさもつかの間、大きな壁にぶち当たりました。私にはピアノやオルガンの演奏経験がなく、音楽の授業が全く出来なかったのです。困り果てた私は、音楽が専門で教務主任の勝哲夫先生に相談しました。

すると、1年間限定で、先生が私の代わりに音楽の授業をし、私が先生の学級で体育を教える交換授業をしていただくことになりました。その時、勝先生に指摘されたのは、オルガンの技術以上に、私の教師としての姿勢でした。「苦手なことを避けたり逃げたりする姿勢は、必ず子どもにも伝わる。そんな教育者が、子どもの可能性を本当に広げられるのか」。その言葉が胸に刺さりました。私は早速、携帯型電子オルガンを購入し、毎日練習しました。自分の演奏をテープに録音し、それを聞いてまずいところを何度も繰り返し練



そほにた・まさあき 専門教科は社会科。愛知県で教壇に立った後、郷里の鹿児島で勤務。伊仙町教育委員会、さつま町立求名小学校教頭などを経て、現職。外務省ODA民間モニターとして、カメルーンの学校を視察した経験もある。

1983 (昭和58)

愛知県西加茂郡
小原村立中部小学校に
新採で赴任

1987 (昭和62)

故郷・鹿児島県の
採用試験に合格。
加治木町立
錦江小学校に赴任

1989 (平成元)

山川町立山川中学校に
赴任。
社会教育主事を取得

1992 (平成4)

松山町教育委員会に
派遣社会教育主事
として赴任

1999 (平成11)

隼人町教育委員会
公民館文化係長に着任。
志学館大との連携講座
「隼人学」などを運営

2002 (平成14)

東市来町立美山小学校
に教頭として赴任

2009 (平成21)

長島町立獅子島中学校に
校長として赴任。
島内の学校の
小中一貫化に尽力する

習しました。更に、授業の進め方を学ぼうと、勝先生の音楽の授業を何度も見に行きました。

約束通り、2年目は自分で音楽の授業を行いました。最初は下手な伴奏をよく笑われました。学級にはピアノを習い、私よりはるかに上手な子どももいます。子どもや保護者に「Aちゃんに弾いてもらえば？」「B先生のクラスは上手だからうらやましい」と言われ、悔しい思いもしました。でも、自分がめげてはいけません。

伴奏の機会を増やそうと、子どもたちにも頼み、朝の会と帰りの会で歌を歌うことにしました。伴奏は相変わらずでしたが、子どもたちは次第に私の演奏に付き合ひ、楽しそうに歌ってくれるようになっていきました。

そして、3年目に入った時です。初めて、勝先生に「子どもの声がよく出ていましたね」と声を掛けていただきました。当時の私にとって、その一言が大きな自信になりました。そして、4年目になんと音楽主任に抜擢されたのです。

「立場が人を育てる」という言葉がありますが、音楽主任となった私がいまさらそうでした。式典での伴奏を繰り返すうちにオルガンへの苦手

意識は消え、音楽の研究授業で高評価をいただいたことで自信が付きました。苦手と向き合う姿勢を教師が見せていくことが、教師と子どもの信頼関係につながり、学級経営にも生きる。郷里での採用がなかった2校目では、音楽で授業参観をし、歌を積極的に取り入れた学級づくりをするまでになっていました。

課題は誰にでもあり どう乗り越えるのが重要

苦手な指導があると、それはそのまま子どもに伝わり、成長の芽をつみ取ることになる——音楽を通じて学んだことは、3校目の中学校でも生きました。いわゆる荒れた学校で、特に道徳の授業がしづらい状況でした。しかし、中学生は自分の生き方や価値観を形成する時期です。情報を与え、考えさせなければだめだと考え、私は、当時人気のあった中学校を舞台にしたテレビ番組などの視聴覚教材を取り入れることにしました。学級全員で番組と一緒に見て、「この時の主人公の気持ちはどうだろう」と質問し、徹底的に考えさせたのです。内容が身近であり、映像で感情移入をしやすいためか、

「苦手な指導があることは 子どもの成長をつみ取ること」



生徒は考えを発表するようになりました。大変な状況であっても、教師が逃げずにきちんと授業をすれば、生徒は応えてくれるのです。

管理職として若手の先生を指導する立場となり、私は毎日授業を見に行くようにしています。指導で良かった点を見付け、「あの板書の仕方はノートに写すと、生徒の力になるね」など具体的に先生方を褒めるようにしています。かつての私がそうだったように、出来ないことは子

どもにすぐに見透かされ、そのままではだめなことは自分が一番分かっています。ですから、私は先生の努力を認めることに注力しています。

苦手は誰にでもあるものであり、重要なのはそれをどう乗り越え、自分の成長につなげるかです。自分で切り抜けられなければ真の力にはなりません。私が成長できたのは、失敗をも見守ってくれた先生方がいたからでした。私も役を任せ、温かな目で見つけていきたいと思えます。